長崎唐寺の媽祖堂と祭神について

― 沿海「周縁」地域における信仰の伝播 ―

二階堂　善　弘

On Gods of Mazu Hall (Maso-do) in Nagasaki Tou Temples (Tou-dera) Spread of Popular Religion in the Coastal Area of East Asia

NIKAIDO Yoshihiro

The Mazu Hall (Maso-do) in Tou Temples (Tou-dera) in Nagasaki has hitherto been thought to be a reflection of the religion of Southern China. However, it is considered that the regional religions were reflected in these temples when they are built: Mindong-faction in Soufuku-ji Temple, Minnan-faction in Fukusai-ji Temple, and Jiangnan-faction in Koufukuji-Temple. It can be speculated by the fact that Gotei-do once existed in Soufuku-ji Temple and it is considered that it honored the God of Plague Expulsion (Wufu Dadi) in Fuzhou.

キーワード：民間信仰、媽祖、五福大帝、福建、湄洲島、長崎

はじめに

中国文化の「中心」と「周縁」を考えた場合、まず最初に中国大陸の主要都市と地方との対比を思い浮かべる。しかし、次に海を越えての範囲にまで話を広げると、中国大陸とその周辺の地域・国との関係を想定することになる。視点を変えることにより、「中心」と「周縁」との相対的な関係は変化していく。

ある宗教信仰を取り上げた場合、言うまでもなくその中心となるのは、「聖地」や「祖廟」といった場所であろう。一方で、ある信仰がその発生した地域では衰えて、伝えられた別の地域で発展する場合もある。その場合は別に「総本山」や「本廟」や「総社」などが構えられ、そこが信仰の中心となる。これらの中心地は、政治的な中心と一致する場合もあれば、離れている場合もある。

中国をはじめとする東アジアの沿海地域の信仰を考えた場合、海神である媽祖の存在が非常に大きい。媽祖は天妃、或いは天后の称もあり、天上聖母・天后娘娘とも呼ばれる女神である。

13世紀以降の東アジア海域の海神信仰は、媽祖がその信仰を圧倒的なものにし、他の海神をその配下に組み入れていく過程が大半であったと言っても過言ではない。この結果、四海龍王や招宝七郎といっ

た過去の海神たちは、みな媽祖信仰の脇、或いはその配下に追いやられることになった。

媽祖信仰における「中心」と「周縁」を考えた場合、まず、その祖廟がある福建の湄洲島がその中心となることは間違いないであろう。媽祖信仰が盛んな地域は、南中国の沿岸一帯であり、福建を中心として、江蘇・浙江・広東、そして台湾となる。中国の北方においては、山東の沿海部や、天津などの一部を除いては媽祖を祀る廟は少ない。

もっとも中国の場合、政治的な中心ほど、寺廟などの宗教施設が残っていない傾向にある。明初に首都が置かれた南京など、かつて存在した十大廟のほぼ全部が消失してしまった。この十廟のうち、媽祖廟だけは再建されて今も残っている。しかし、他の廟は武廟が建物を存する程度で、他はすべて失われている。これは太平天国の乱、そして文化大革命の影響が大きいと思われる。

さて日本の沿岸部、特に長崎などの港、また琉球などにおいても媽祖信仰は見られるが、この場合は媽祖信仰の中心地から見れば、「周縁」に属するものと思われる。そのあり方も、中心からすればやや異なった性格のものであると考えられる。そもそも長崎では媽祖廟は独立しているとはいえ、寺院の中の１つの建物であり、仏寺の中に併祀されるといった性格を持つものである。

長崎の唐寺において、今でも媽祖堂が残っているのは、崇福寺と興福寺の二箇所である。ここに祀られる神については、いまだに不明な点が多い。戦前の県の調査などを踏まえて、福建系の神が存在することについては検討したが[1]、到底明確になったとは言いがたい。そもそも、崇福寺の創建当初の構造は、現在残るものと異なっていたとされる。これらの祭神について考えるには、もはや唐寺のみで考えることは難しい。ここでは、湄洲島及び関連する地域を考慮に入れつつ、再検討してみたい。

一　崇福寺の改建

崇福寺の現在の殿宇は、山門・大雄宝殿・鐘楼・護法堂・媽祖堂・開山堂などから成っている。その創建は諸書に寛永６年（1629）とされるが、宮田安氏によればその説は疑わしいという[2]。

> むしろ、開基僧超然が渡来したのが寛永６年（1629年）で、寺創立の免許をうけたのは寛永９年（1632年）、初めて殿堂をおこしたのは寛永12年（1635年）とする史料（崇福寺保存の崇福開創歴代住持宝事）の方が信憑性が高いように思われる。

現在の殿宇が、かなり早い時期より改建されていることについては、すでに山本輝雄氏による指摘がある[3]。

1）拙稿「長崎唐寺に祀られる福建系の神々」（『アジア文化交流研究』関西大学アジア文化交流研究センターCSAC・第２号2007年）45～52頁。

2）宮田安『長崎崇福寺論攷』（長崎文献社1975年）12頁。なお引用においては、漢数字と旧字体を一部改めている。

3）山本輝雄「唐寺・崇福寺が禅宗寺院として確立する時期についての一考察―三塔の伽藍に占める地位をめぐって―」（『日本建築学会九州支部研究報告』第41号2002年）574～576頁。なお該当論文は、国立情報学研究所CiNii（http://ci.nii.ac.jp/）からのダウンロードによる。

た過去の海神たちは、みな媽祖信仰の脇、或いはその配下に追いやられることになった。

媽祖信仰における「中心」と「周縁」を考えた場合、まず、その祖廟がある福建の湄洲島がその中心となることは間違いないであろう。媽祖信仰が盛んな地域は、南中国の沿岸一帯であり、福建を中心として、江蘇・浙江・広東、そして台湾となる。中国の北方においては、山東の沿海部や、天津などの一部を除いては媽祖を祀る廟は少ない。

もっとも中国の場合、政治的な中心ほど、寺廟などの宗教施設が残っていない傾向にある。明初に首都が置かれた南京など、かつて存在した十大廟のほぼ全部が消失してしまった。この十廟のうち、媽祖廟だけは再建されて今も残っている。しかし、他の廟は武廟が建物を存する程度で、他はすべて失われている。これは太平天国の乱、そして文化大革命の影響が大きいと思われる。

さて日本の沿岸部、特に長崎などの港、また琉球などにおいても媽祖信仰は見られるが、この場合は媽祖信仰の中心地から見れば、「周縁」に属するものと思われる。そのあり方も、中心からすればやや異なった性格のものであると考えられる。そもそも長崎では媽祖廟は独立しているとはいえ、寺院の中の１つの建物であり、仏寺の中に併祀されるといった性格を持つものである。

長崎の唐寺において、今でも媽祖堂が残っているのは、崇福寺と興福寺の二箇所である。ここに祀られる神については、いまだに不明な点が多い。戦前の県の調査などを踏まえて、福建系の神が存在することについては検討したが[1]、到底明確になったとは言いがたい。そもそも、崇福寺の創建当初の構造は、現在残るものと異なっていたとされる。これらの祭神について考えるには、もはや唐寺のみで考えることは難しい。ここでは、湄洲島及び関連する地域を考慮に入れつつ、再検討してみたい。

一　崇福寺の改建

崇福寺の現在の殿宇は、山門・大雄宝殿・鐘楼・護法堂・媽祖堂・開山堂などから成っている。その創建は諸書に寛永６年（1629）とされるが、宮田安氏によればその説は疑わしいという[2]。

> むしろ、開基僧超然が渡来したのが寛永６年（1629年）で、寺創立の免許をうけたのは寛永９年（1632年）、初めて殿堂をおこしたのは寛永12年（1635年）とする史料（崇福寺保存の崇福開創歴代住持宝事）の方が信憑性が高いように思われる。

現在の殿宇が、かなり早い時期より改建されていることについては、すでに山本輝雄氏による指摘がある[3]。

1）拙稿「長崎唐寺に祀られる福建系の神々」（『アジア文化交流研究』関西大学アジア文化交流研究センターCSAC・第２号2007年）45～52頁。

2）宮田安『長崎崇福寺論攷』（長崎文献社1975年）12頁。なお引用においては、漢数字と旧字体を一部改めている。

3）山本輝雄「唐寺・崇福寺が禅宗寺院として確立する時期についての一考察―三塔の伽藍に占める地位をめぐって―」（『日本建築学会九州支部研究報告』第41号2002年）574～576頁。なお該当論文は、国立情報学研究所CiNii（http://ci.nii.ac.jp/）からのダウンロードによる。

崇福寺山門

また宮田安氏も『長崎崇福寺論攷』において古図や古記録を博捜して論じている[4)]。これらによれば、宝永年間以前の崇福寺の姿は、『聖寿山十二景図』及び『宝永四年・長崎寺社帳・町方郷方』から復元するより他は無いとのことである。宮田氏と山本氏の整理するところによれば、かつての崇福寺の殿宇は、次のような建物で構成されていた[5)]。

大殿・天王殿・禅堂・鐘楼・庫裏・唐門・媽祖堂・伝法堂・祖師堂・関帝堂・祠堂・書院・方丈・五帝堂・山門・経堂

現在の崇福寺の護法堂も一応天王堂・関帝堂などに分けることができる。宮田安氏によれば、現在の護法堂の観音像は、もとは別の場所にあった[6)]。

このお堂は向って右が関羽をまつる関帝堂で、向って左が韋駄天をまつる天王殿である。まんなかの観音はもと禅堂に祀られていたもので、現在の祠堂のところにあった開山堂が腐朽し、隣りの禅堂を開山堂にしたとき、禅堂の観音がここに移ったのであった。

今の護法堂には、関帝・関平・周倉・韋駄天・観音などが並ぶ形で祀られている。しかしこれらは本来、関帝・関平・周倉は関帝堂に、韋駄天は天王殿にあったものと考えられる。つまり、崇福寺の像や建物

4）前掲宮田安『長崎崇福寺論攷』３～10頁。
5）前掲宮田安『長崎崇福寺論攷』312頁、及び前掲山本輝雄「唐寺・崇福寺が禅宗寺院として確立する時期についての一考察」574頁、一部節略。
6）前掲宮田安『長崎崇福寺論攷』309頁。

については、創建当初よりかなり構成が変化しており、本来の役割が不明確になっているものが多々存在するのである。

二　五帝堂について

ここで問題になるのは、記録によくその名が見える「五帝堂」である。現在、この五帝を祀った殿は無く、また五帝神の像が何処にあるかも不明確である。一つ可能性として考えられるのは、護法堂の韋駄天の脇にある幾つかの像である。

崇福寺護法堂の韋駄天と諸神像

またもう一つ、可能性として考えられるのが、「三帝大帝」の像である。現在、崇福寺の媽祖堂には向かって右に三官大帝、左に三帝大帝という神が祀られているが、この「三帝大帝」という名称はやや怪しい。

崇福寺媽祖堂

三官大帝は、天官・地官・水官の三官を祀ったもので、これについては現在でも台湾など各地に廟が見られる。しかし一方で、「三帝大帝」という称はあまり見ない。或いは三官大帝の称号に引きずられたものではないだろうか。本来は「五大帝」であったものが誤って伝えられたものではないかと思われる。興福寺の媽祖堂にも三官大帝は祀られているが、こちらは伝統を反映していると考えられる。

実は「五帝神」とは、福建の福州から莆田・仙游一帯において広く祭祀される神である。現在でもこの地域においては「五帝廟」が各所に存在する。この神の性格は閩南における王爺に近い。

福建仙游の五帝廟（集賢廟）

注意すべきは、媽祖信仰の「中心」とも言える湄洲島において五帝廟が存在することであろう。

湄洲島の媽祖祖廟に附設する五帝廟

恐らく、媽祖信仰において「周縁」に属する長崎の五帝堂とは、「中心」である湄洲島の媽祖廟の五帝廟と同じ性格を持つものと思われる。またこの状況は、「福州寺」と呼ばれた崇福寺が、福州一帯の信仰である五帝信仰を取り込んでいるということも示している。

さてそれでは五帝というのはどういった神なのであろうか。実は、この点が現在の福州一帯の諸廟でも不明確になっている。

まず湄洲島の五帝廟には、五帝神が祀られているのであるが、この五帝については、その由来が甚だ曖昧であるとしか言えない状態であった。碑文を見ても、五帝神の正体は不明である。廟も像も比較的新しく作られたもので、これもあまり参考にはならなかった。

湄洲島五帝廟の五帝像

「五帝」という名称を聴いて、まず想起するのは『史記』五帝本紀に記載される聖王としての五帝であろう。すなわち「黄帝・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜」である。もっとも、『史記』以外の資料を見るに、五帝をどの帝王に当てるかは文献によってかなり異なる。伏羲や神農を含む場合もある。これらの五帝を祀る習慣は、士大夫層であればあり得るが、民間信仰ではそれほど無かったと考えられるものである。

これとは別に、道教では「五方五帝」という呼称がよく使われる。すなわち「東方青帝・南方赤帝・中央黄帝・西方白帝・北方黒帝」の五位の神である。この五方の神であれば、民間で祭祀されていてもそれほど違和感は無い。湄洲島の五帝廟は、この五方五帝を意識しているようであった。

しかし、恐らく五帝神はこれらとは別系統の神であると考えられる。重要なのは、五帝神が閩南の王爺と同じく、瘟神の性格を有することである。瘟神といえば、まず想起されるのは、『三教搜神大全』「五瘟使者」に見える五瘟の神である[7)]。

春瘟　張元伯
夏瘟　劉元達
秋瘟　趙公明
冬瘟　鍾仕貴
総管中瘟　史文業

これらの神については、他の神との混同が早くから行われている。すなわち、五通神・五顕大帝・五龍神などの神と習合が行われ、福州との関連からか、五福大帝との称もある。また五方五帝と混同しやす

7）『絵図三教源流搜神大全』（上海古籍出版社1990年）157頁。

い面もあった。

福清の石竹山道院においては、五顕大帝と五帝との習合が見られ、五帝神と五顕華光大帝を共に祀っていた。

福清石竹山道院の五顕宮

福州・福清と同じく、閩東の信仰文化圏にあり、また古くからの信仰をよく残している馬祖諸島においては、華光大帝の廟に五福大帝が併祀されていた。

思うに五帝とは、五瘟神か五顕神、或いはその習合であったものが、五福大帝となった可能性が一番高い。また崇福寺に五帝堂があったのは、これらの福州一帯における五帝信仰を反映したものであると考えられるのである。とはいえ、これらについては閩東の信仰についてさらに調査を重ねる必要があろう。

三　九鯉湖仙について

崇福寺には、また九鯉湖仙と大道公が祀られていた可能性が高いことを以前に指摘した[8)]。媽祖堂に祀られる神については、現在は「三帝大帝」と「三官大帝」とされているが、資料によっては水官大帝・大道公・九鯉湖仙などとも書かれ、いまだに比定が難しいものとなっている。

九鯉湖仙とは、これも福州から莆田一帯にかけて広く祭祀される神である。その信仰の中心となるのが、莆田の西に位置する仙游にある九鯉湖である。かつてここで何氏の九人の兄弟が仙人となったという伝承があった。福州においても、九仙観などの大きな道観があり、この九鯉湖仙を祀る。

九鯉湖自体は大きな湖でなく、むしろ岩盤と滝が中心になった景観を持つ一帯である。確かに、その姿は仙境を思わせるものがある。

8）前掲拙稿「長崎唐寺に祀られる福建系の神々」46～47頁。

仙游の九鯉湖

しかし、現在九鯉湖においては、九仙を祀った廟は「九鯉湖寺」という寺院になり、僧侶が祭祀を行っていた。しかし別殿では玉皇大帝を祀る玉皇楼があり、恐らくかつては道観であったと考えられる。

九鯉湖仙像

九鯉湖仙が崇福寺で祭祀されたかどうか、いまだに不明な点が多い。そもそも、記録上は「九鯉湖八仙」となっている。以前、これは九鯉湖仙の誤りであろうと断じたが[9]、実は九鯉湖の廟の下部の水晶宮には八仙が「九鯉湖八仙」として祭祀されており、この記載にも一定の信憑性があることが判明した。但し、崇福寺には八仙らしい像は現在見あたらない。

四　福済寺と興福寺の祭神

崇福寺においては、以上見てきたように五帝や九鯉湖仙といった、閩東の信仰の強い影響があったことが看取できる。それでは、同じ唐寺の福済寺と興福寺においてはどうであろうか。

9）前掲拙稿「長崎唐寺に祀られる福建系の神々」47頁。

「漳州寺」との称があった福済寺においては、恐らくもっと閩南地域の信仰の影響が強かったと考えられる。ただ、現在はその殿宇は全く残っていないので、幾つかの記録より推測するしか無い。

崇福寺において大道公が信仰されていたという形跡があることは判明しているが、しかし、もしこの大道公が保生大帝を指すならば、むしろ福済寺で祭祀されていた可能性が高い。とはいえ、莆田にも保生大帝を祀った廟は存在することから、崇福寺に保生大帝があっても不自然とまでは言えない。

福済寺には、むしろ水仙王が祀られていたということが、その地域性を表しているかもしれない[10)]。

興福寺の媽祖堂においては、中心に媽祖と千里眼・順風耳を祀り、向かって右に関帝があり、向かって左には三官大帝がある。媽祖堂も寛文年間に火災を経ており、恐らくは創建当初のままではないと考えられるものの、その祭祀の形式については、古い形を残すものと推察される。

興福寺媽祖堂内部

唐寺においては、媽祖と関帝の信仰は共通するものとなっている。この二つの神の信仰については、福州でも漳州でも泉州でも共通しているし、領域を広東に広げてもそれは変わらない。ある意味では、南中国に普遍的なものだからである。

問題になるのは三官大帝である。三官大帝の信仰は、道教の三官信仰が元になっており、普遍的な信仰と言える。しかし、閩南地域においてはやや偏った印象がある。

実のところ、現在台湾で多く見られる三官大帝廟は、三山国王廟などと共に客家人が在住していた地域によく見られるものである[11)]。

興福寺は、一名を「南京寺」とするが、この称は漠然と江南を指すものであり、ここに来る商人たちの出身地が福建よりは北の江蘇・浙江などの地域であったことを示すものである。三官大帝の信仰は閩南の他の地域にも見られるものなので、簡単に判断はできないが、或いは江南地域ならではの特色を示すものなのかもしれない。

10）李献璋『媽祖信仰の研究』（泰山文物社1979年）538頁。

11）黄子堯『台湾客家与三山国王信仰』（愛華出版社2005年）21頁。

おわりに

長崎の唐寺の媽祖堂は、いままでは漠然と「中国南方」の信仰を反映しただけのものと考えられてきた。しかし、特にその創建当初においては、崇福寺は閩東系、福済寺は閩南系、興福寺には江南系のそれぞれの地域信仰が反映していたのではないかと考えられるのである。長崎という、中国の宗教文化からすれば周縁に位置する地域から、南中国を見た場合、その信仰のあり方に、もっと別の枠組みが見えてくる可能性があるのではないかと考えられる。本稿ではあくまでその一端を示すのみとなった。今後は、これを沖縄や馬祖などの他の「周縁」からも多角的に検討してみたい。